# 無言の饒舌

野火俊弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
無言の饒舌

【Ｎコード】
Ｎ４４９１Ｅ

【作者名】
野火俊弥

【あらすじ】
喋らない男を不審に思うジョーは彼を嫌うが、更に不審なお喋り男の存在が喋らない男の理由を浮き彫りにしていく

## 喋らない男とお喋り男

ゴブレットに、氷を数個放り込み其処に角張った瓶から適量の酒注ぎグレープフルーツジュースで満たしバースプーンで掻き混ぜ、スプーンの背を伝わせて青色を沈めた。八ツ切りにしたグレープフルーツの皮を丸めてからゴブレットの縁に引っ掛けると、滲んだ帯が僅かに揺れた。
棚に置いてあるモルトグラスに手を掛けたところで舌足らずな声が制止した。

「ジョー。そっちじゃなくてコッチ」

矢口が指差したのは、ジョーが手に掛けたグラスの斜め下にあるフタ付きのモルトグラスだった。鈴蘭を少し引き伸ばした様な形で可愛らしいな、と思った。

「高ぇから割んなよ」

ジョーは笑って返事をした後グラスを手に取り、きっちりと量ったウイスキーを注いでフタをした。
カウンターに、座っている女にアベラワーを隣の男にチャイナブルーを提供し彼らの会話を妨げない程度、彼らの挙動が分かる程度の位置へ移動しそこから厨房を見ると奥でパイプ椅子に腰掛けて本を読んでいる苦前の姿が見えた。
ジョーは一度だって、この男の声を聞いたことが無い。四ヶ月働いて一度も、だ。
「すいませぇん」とボックス席から間延びした女の声が呼んだので視線をそちらに移動させ、愛想良く応対するとペペロンチーノが食べたいと云うので厨房にオーダーを通したが苦前は応答せず、のそ

りと立ち上がり調理に取り掛かるだけだった。
　閉店少し前に、苫前がゴミ袋を持って裏口から出ていくのが見えたのでジョーは嫌味たらしく大声で「オツカレ様っしたぁ」と云うと苫前は振り返り、少しだけ頭を下げ出ていった。

「不気味っすよねぇ」
「何が」
「苫前さんスよ、一言も喋んねーの」

冷蔵庫にギネスを補充しながら矢口は「前はよく喋る人だったんだけどねぇ」と云った。生ビールの水通し洗浄を終えたジョーは、外灯の電気を消してから煙草に火を点け、矢口が差し出したアサヒを受け取り栓を開け、棚からロックグラスを取出し氷とオールドクロウを注いだ。

「何で喋んなくなったんスか」

矢口は受け取ったグラスに口を付け「何でだろうなァ」と云った。
　翌日のフィニスティルは矢口がライブに出演する為に午後十時からの営業だった。
ジョーは九時半頃に店に出て冷蔵庫にフルーツを入れ込み、ミントを水に浸した後お気に入りのアイリッシュパンクを店内に流した。フィドルの絶叫は何度聞いても素晴らしい。

「オハヨーございまぁす」

テーブルのランプに火を点けていると苫前が出勤したので例によって大きな声で挨拶するが昨夜と同じく軽い会釈だけで、その後は終始無言だった。
　十時を過ぎても矢口は出勤してこなかった。ジョーは、どっかで

酔っ払ってんな。という確信があった。ライブに出る矢口は何時もステージ裏で呑み、ステージ上でも呑んでいるからだ。

「遅ぇすね」

厨房でパプリカを火で炙っている苫前に喋りかけると、壁にかかった時計を見てからジョーにニコと笑い、また仕込みを始めた。ジョーは溜息をついた。

それから更に一時間程経った頃にベロベロに酔っ払った矢口と同じくベロベロの細長い男がやってきた。矢口はカウンター内に立ち、男はカウンターのスツールに座った。

初めて見る客だった。爬虫類のような顔を真っ赤に染めてヘラヘラ笑うのが何だか可笑しい。

「いやー、今日も最高だったね」

「そーぉ？全部一日で作った曲ばっかやぜ」

馬鹿笑いしている二人の注文はクロウ。丸氷を取り出す為にしゃがむ頭の上で「ケンちゃーん、久し振りぃ」と云う声が聞こえた後、爬虫類顔は厨房に向かった。

あらかさまに、迷惑そうな顔をしている苫前の下の名前がケンだと云うのをジョーは初めて知った。

そして爬虫類顔は「ちょっとケンちゃん借りるよ」と云って苫前の肩を抱き裏口から出ていった。

「知り合いすか」

「苫前くんの、ね。でも俺のライブに良く来てくれるの」

「へぇ。苫前さん友達居たんだ」

軽くステアしたクロウを矢口に差し出し果たして苫前は、あの男と

どんな会話をするのだろうかと思った。
　程なくして帰ってきた苫前の表情に色はなかった。爬虫類顔はニヤニヤしていた。
ジョーは、何だか爬虫類顔とは仲良くなれそうだと思った。店内に流れる音楽にあわせて机を指で叩いていたから。
その男の前に、先ほど仕込んでいたパプリカで作ったマリネを差し出す苫前は、やはり無言だった。味なんて染みて居ないだろう。

## 煙草とライターとヨッパライ

苫前の出したパプリカのマリネに手を付けず、酒ばかりを胃に流し込む爬虫類顔は舌の回転が怪しくなって来た頃に「帰る」と言ったのでジョーは伝票を締め、合計部分を切り取り、裏返して男に渡した。

「タクシー呼びましょうか」

「要らない、トモダチが迎えに来るから」

釣りを受け取って席を立った男は、厨房に向かって「連絡待ってるね、ケンちゃん」と言って店を出ていった。

苫前は、パイプ椅子から立ち上がり裏口から出ていった。ジョーも、それに続いた。

川から立ち上がる藻の腐った臭いを嗅いで夏だと思う、明日は雨が降るだろう。街の明かりが、垂れ下がった雲を映し出していた。

ビールケースに腰掛けている苫前の隣に立ち、煙草をくわえた。ライターは持っていたが、何となく苫前に火を貸してくれないかと言うと何処かのクラブの赤いライターを差し出された。苫前の様な地味な男でもクラブなんかに行くのかと思うと、何だか少しだけ苫前というニンゲンに触れた気がした。

　その日は、矢口がヨッパライすぎて仕事を放棄し、イヤッホーゥと言いながら欽ちゃん走りで逃亡した為に早々に店を閉めざるをえなくなった。ジョーは何時もの様にカウンターを片付け店を出て、サァ一杯呑みに行こうかと時計を見ると、大抵の飲み屋が閉まる時間だった。

煙草を吸おうと、ポケットを探る。

ラッキーストライクの箱に苫前から借りたライターが入っていた。

ライターを借りパチするのは、ジョーの悪いところだ。本人も悪気が有る訳ではないのだが、何時も気付いた時はシマッタと思い持ち主に謝るのだが大抵の場合、良いよライターくらいと言われるので

また同じような事を繰り返してしまう。
ふと、苫前は一体どんな店に出入りするのだろうと興味が湧いた。
ライターに印刷された住所は、フィニスティルから歩いて行けそうな距離だった。苫前から借りたライターで煙草に火を付け、歩き始めた。

## マスカレード

煙草を吸い終える前に、赤いライターの店に着いた。赤い電飾の前に女が立っていた。綺麗な人だと、ジョーは思い笑い掛けたがツンとそっぽを向かれ恥ずかしくなったので彼女の目から逃げるように店内へ入った。

カウンターにライターと煙草を置き、バーテンダーにビールを頼み、注がれる間に奥のスツールに腰掛けボンヤリとしている女に声を掛けてみた。女の前のグラスには飲み物が入ってなかったから。

「何呑むんですか」

女は、大きな目を瞬かせて首を傾げた。ビールをジョーに出しながらバーテンダーは優しく喋りかける。

「理絵ちゃん、お兄さんがオレンジジュースくれるって」

オレンジ、と聞いて八重歯を見せ笑う彼女が可愛かったので

「ウオッカは？」と云うと

「この子、お酒呑めないの。あと煙草もゴメンね」と云われたので

ライターと煙草をポケットにしまい込んだ。

理絵は白痴だったが、絵を描くのが巧かった。誰かを待っているのか、紙が無くなればバーテンダーが持ってきてまた描く。理絵の前は作品が無造作に広げられ、まるで美大受験生の様な熱心ぶりだ。

「ビュッフェみたい」

大きな目と、一文字に結ばれた唇を持つ自分の似顔絵を見てジョーはそんな感想を漏らす。

「ビュッフェ」

「理絵ちゃんの事」

分かっているのか居ないのか、笑って画家の名前を呟く。オレンジジュースも少なくなった。

店の外から女の声が聞こえる。あの美人だろうか、結構時間が経っ

ているとジョーは思った。
「るっせー、ドブス寄んな」
「バンちゃん酷い」
ドアを開けて入ってきたのは、細い目の男に肩を借りてよろめく爬虫類顔だった。その後ろには、先程の美人が見えた。
途端、理絵は立ち上がり「バンさん」と言った。彼は猫なで声で彼女の名前を呼び、細目の肩を離れヨタヨタと歩み寄り理絵を抱くと、二人で床に崩れた。
細目が手を伸ばすが、立ち上がろうという気配はなく、理絵は男の頭を撫でていた。美人は、俺の後ろでバーボンを注文している。
「片山ァ、水」
ハイハイ、と云う細目が美人のチェイサーを掻っ払い酔っ払いに渡した。呑み切れず口元ダダ漏れ。深い藍のスーツに染み込んでいく。グラスを受け取った理絵は水を一口呑んだ。男は何が可笑しいのか、そんな彼女を見て笑う。不思議だった。男の目がジョーを捉え「あ、フィニスの」と立ち上がり、カウンターを支えにジョーの目を覗き込む姿勢に
「名前なンてんだっけ俺聞いたっけ」と言ったので、通り名を答えると
「日本人？」と笑われた。
「お兄さんからオレンジジュース貰ってます」
「ほんと？ありがとぉ、ジョー君も呑み」
礼を云って、半分くらい残っていたビールを煽ると新しいビールが既に用意されていた。美人がまたバーボンを注文する。
　スツールに座った自分の膝に理絵を乗せ、彼女が描く絵を見つめる男の姿は、妹をあやす兄の様だ。
「何でこの店に？」
流石に苦前からパクったライターを頼りにとは言いにくく、何となくと答えておいた。画用紙に、鳥が描かれようとしている。白い、大きな鳥だ。

「苫前さんとは友達ですか」
「良い男だろ。俺、惚れてんの」
口元のビール泡を吹き掛けた。その様子を見て、可笑しそうに口元を歪め「俺ゲイじゃないんだけどね、カッコいいんだ」と言って、グラスに口を付けた。ジョーには理解出来なかった。理絵がミックスナッツのクルミだけを選んで食べている。鳥は半分、黒く塗り潰された。何時の間にか片山は美人の愚痴を聞かされている。
「マスカラスっーのかな、ケンちゃんは」
酔っ払いの戯れ言の様に誰に云うでもなく呟いた言葉も分からなかった。黒く塗り潰された鳥を
「カラス」と云う理絵を男は褒めた。
　気が付くと、空が白んでいた。急に眠気が沸き上がり、欠伸が出た。そして深呼吸を一ツ付いてから
「ご馳走様でした」と財布に手を掛けようとしたジョーを男は止めた。
「いいよ、オレンジジュースの分」
ジョーは驚き、やはり財布を出そうとしたが男は笑いながら気にすんなよと云う。
「また来な。理絵ちゃん、君の事気に入ったみたいだから」
立ち上がったジョーを上目に見ながらヘラヘラする男に頭を下げ、じゃあ。と向けた背中に
「次来る時も、ライター忘れないでね」と云われ、振り返り男の顔を見た。
天井のスポットライトに照らし出される骨格の浮いた男の顔は、笑っているのか定かではなかった。

## カリプソ

「カリプソ？聞いたことない」
昨日の店の事を矢口に話すとそう返ってきた。あの男に出会った事は言わなかった。呑み町の入り口、あんな真っ赤な看板すぐに目に付くはずだと思う。しかし矢口は首を傾げながら、「んな上品な店がこの界隈に有ると思うか？」と云う。在るとしたらヤバい店だよ。
「ヤバいって」
矢口は右手親指で頬を傷つける真似をする。ジョーは途端に恐ろしくなった。昨夜の酒が、何か秘密めいた契約のように思えた。
「冗談だよ、ビビんな。今度連れてけよ」
ジョーは笑いながらスコッチの瓶を磨くがやはりあの店は何かしら在りそうだと妙な確信があった。その確信はあの男の奇妙な表情が頭に浮かんだからだ。
「そういや苫前さんは」
「用事あっから遅れるって電話で」
「え。喋るんすか、あの人」
「馬鹿、おめー何だと思ってんのよ」
店に入ってきたのは、若い女の子三人だった。ジョーには彼女等が十代に見えたので、年を聞いたらやはり十代だった。酒は呑まないから、ご飯だけ食べさせてくれと云う。どこかで働いているのかと聞くと、カリプソ近くのラウンジで働いているらしい。その中の一人がカウンターから身を乗り出して声を潜めジョーに尋ねる。
「赤いライター持ってない？」
「何それ」
「持ってんでしょ」

十代にしては成熟した女の顔をしているとドキリとした。しかし昨日からあのライターの事ばかりだな、と妙に思う。
「持ってたら何か在るの」
「カリプソ」
「知ってるの」
彼女はニコリと笑って、身を退き携帯を取り出し番号を交換しようと云う。隣の二人が笑っている。矢口が三人前のオムライスを持って厨房から出てきて「モテるって良いよな」と云う。スプーンとフォークを彼女等に渡した。
苫前が出勤したのは、それから暫く経ってからだ。その異様な姿を見てジョーも矢口も、驚いた。
右目は青く痛々しく腫れ上がり、（普段も喋らないが）喋りにくそうなほど唇が腫れており、裂けたらしい口端には絆創膏など貼られていたり、頬には擦り傷なんかもこしらえていたりして何というか
「男前っすね」そう言って矢口に頭を叩かれた。
「大丈夫？」
矢口の問いに苫前は笑いもせず、頷いて腫れていない左でジョーを見て厨房に行き、裏口から出ていった。苫前の目にどんな感情が籠もっているのか、ジョーには分からなかった。ライターを返そう、と思いその後ろを追い掛ける。
腫れた唇にタバコをくわえる苫前に赤いライターで火を差し出す。煙を吸い込み吐き出す。無言だった。
「あの、これ」
「持っとき、な。板東さん、き君の事気に入ったって」
初めて聞いた苫前の声はくぐもっていた。そして吃りがちで聞き取りにくかった。
「あの人は」
「き聞いちゃ駄目だよ」
そう言って、川に煙草を投げ捨て店内に戻る苫前の背中は妙に広く感じられた。

## 赤いライターと云うチケット

ファミレスは人が疎らだ。その風景に見る顔たちは、本当に何だかどうしようもないような色彩を帯びている様に思う。そんな風景もジョーは好きだった。夜明け前の気怠さ入り交じった雰囲気の中でボンヤリとするのが好きだった。

女の子の名前は美香と言った。そして驚いた事に高校に通っているらしい。留年だとか。そんなでなく、現役高校生だ。学校の近くで不味いんじゃないのかと聞くと先生がお客さんだから心配ないと云われたのでジョーは、その話題に触れまいと決め、ライターの話題を切り出した。

「あのライター持ってたら何か良い事、有るの」

「あの店から出てきたから知ってると思ってたのに」

「知らない」

「あの店は本当はカジノ、会員制のね」

カジノバーか、ますます洒落てる。と思ったが、よく考えればそんな健全なはずは無い。ジョーはジッポで火を付け煙を吐き出した後、あの店に対する見解を答える。

「裏カジノ？」

「そう、アル中のヤクザが経営してるね。開いてるのあんまり見たことないけど」

アル中ヤクザと聞いて爬虫類顔が浮かぶ。あの奇妙な表情が浮かぶ。そして苦前はジョーにライターを持っておけと言った。どうにも、きな臭い話だ。

「で、美香ちゃんは何でそんな事知ってるの」

「お客さんでライター探してる人が居てね。近いうちに凄いイベントあるから、その前に手に入れたいって。ねぇ、何処で貰ったの」

ジョーは、拾ったと答えコーヒーを一口飲んだ。美香は不貞腐れて

いる。凄いイベントと云うのは賭け事の事だろう、何だか凄い物を貰った気がする。夢のような暗い世界へのチケット。あの腫れた苦前の顔が思い浮かび、恐らくは爬虫類の仕業だと思うと薄ら寒くなった。爬虫類顔と苦前は一体どんな関係で繋がっているのか、ジョーには全く想像出来ないがロクデモナイ関係だと云う事に間違いは無い。しかし、苦前の様なおとなしい地味な男が何故と思う。

「要らないのなら頂戴よ」

「いや、要る」

「買うから。幾ら？」

「金の問題じゃないんだ」

美香は、ますます不貞腐れツンとそっぽを向いてしまったのでジョーは伝票を持ち、立ち上がった。よくある事の様に当然に美香は何も云わず立ち上がる。

支払いを済ませ、店を出てから美香が口を開いた。

「今度カリプソ行く時は一緒に連れて行ってよ」

「今度ね」

そう言って店の前で美香と別れた。

　極天街のアーケードを通り、駅に向かって居ると後ろから自転車のベルを鳴らされたのでジョーは脇にずれた。

「ジョーやぁ、何しよん」

振り返ると往年の悪友、加藤と盛田がニケツで横付けしてきた。

「何もしてないわい」

「今から朝マックしに行くけど行かんか」

腹は減っていなかったが行くと答えると駅の中にあるマクドナルドと云い、二人でさっさと行ってしまったので、とにもかくにも駅に向かった。

そしてマックでフィレオフィッシュのセットを食った。

## 寿司屋のトマト

遠くから見ても、完璧に酔っ払っていると思われた。コンビニ前に設置してあるベンチでうな垂れて口に含んだ牛乳を地面に垂らしているのは、どうやら地面に潰れた虫に掛けているらしかった。絶対に声を掛けられたくない、とジョーは思い何も見なかった様に来た道を引き替えそうと振り返り数メートル歩いた先で肩を叩かれ振り向く。冷たい指が頬骨に刺さる。紙パックから生えたストローを噛んだ爬虫類顔が少し上の目線に有った。無花果の実が割れた様な唇が横に広がる。

「引っ掛かった」

押し付けてくる指の爪が痛く、ジョーは身を捩った。男が目線を合わせる様に少し猫背になるとシャツの腹部にプリントされたパンダの顔が歪んだ。

「ジョー君、暇？」

酒に焼けたのか、擦れた低い声だった。ジョーは返答に躊躇した。ストローを牛乳が登り、落ちる。男はまた柔らかく笑う。毒気は無い。

「飯食いに行くから、付き合ってよ」

ジョーは首を振った。男の後ろから吹く風は安い酒の臭いがした。ずくずくとした痛みが胃の下の方から沸き上がってくる。その痛みが恐怖による物なのか、興奮による物なのかは判断しかねた。男は何処に行くとも告げず、夜の店が犇めき合う通りを歩いた。ジョーはその後ろを付いて歩く。静まり返った街は不気味だった。寿司屋の前で爺が水を撒いていた。こちらを見遣るとホースを下げた。コンクリに打った水から立ち上がる匂いを嗅いだ。

「暑いねぇ」

「毎日堪らんぜ、酒も旨かろ」

喉の奥で潰した笑い声が聞こえた。店の奥から野球中継が流れ出て

いる。男は振り返り「呑んでこ」と云い、まだ店の中にある暖簾を潜った。爺は水の流れるホースを持ったまま、ジョーが入るのを待っていた。男は、冷蔵庫からキリンを取り出していた。

「鱧、入ったんや」

「うん、うん」笑みを作ったまま、ジョーにグラスを渡しビールを注ぐ。泡が零れそうになり慌てて口を近付ける。男はビール瓶に口を付けた。寿司屋はカウンターでごそごそと何かをスーパーの袋に詰めている。ジョーは、またビールを一口含んだ。カウンターの向こうから差し出された袋を男は受け取った。トマトが沢山入っていた。

「ユウジさんの野菜美味しいから理絵が良う食うよ」

「ほうか。近いうち一緒に来なあれ。今の時期の鱧は旨い、来週からは夜市もある」

男は、瓶に残ったビールを飲み干し礼を云って店を出た。ジョーは蒸した路地を歩きながら果たして、この男が飯を炊くのだろうかと不思議な面持ちでその背中を見た。冷たい指で野菜を洗い、鍋に放り込むのだろうかと思った。台所に立つ姿が余りに不釣り合いな男だった。

つと男が立ち止まり路地の終わり、そびえ立つビルディングを見上げた。人の入らないビルディングは無機質であるとジョーは感じた、以前は複合型の商業施設だったが建物自体の耐震性の問題で年の初めに閉店したのだった。極楽町の一等地であるからその内、何処かが買い取って新しく店を始めるだろうとジョーは思っている。

「来週の火曜日、空けといて」

白日の下、男の顔は青黒かった。本当に、料理なんかするのかと聞きたかった。まるで陽炎の様だ。

「飯、何が良い？」

目的地は決まってないらしい。

## 路地裏にて

トマトの入った袋を持たされたジョーは何かサッパリとした物が食べたいと伝えると、男は少し考えるように中空を見た後「冷や中食いに行こうか」と云って歩き始めた。恐らく夜になるとピンク色のネオンが犇めく道に出る。ポン引きが掛ける声を躱して奥へと進む。暗い路地に入った所で爬虫類顔とスーツ姿の男二人とが出会い頭にぶつかった。飲みかけの牛乳が黒いスーツを濡らした。

「あ、すんません。大丈・・」

男が気遣う言葉を言い掛けた所で胸ぐらを掴まれて路地の奥に引っ張り込まれている。素早い展開にジョーは戸惑った。

「何しとん」

「ごめんなさいって、」

美香が、この男はヤクザだと言った。酔っ払って居るが大丈夫だろうと思って男の後ろに隠れるように移動する、と肉を打ち付ける音がして男がジョーの方によろめき尻餅を付いた。キョトンと男を見ると殴られたらしい頬を押さえキョトンとする顔があった。

「このスーツ高ぇんやけど」

「お金？」

「誠意よ」

見上げる爬虫類顔は、スーツの男よりも幾らか背が高いが凶暴な部分は感じられない所でジョーは大変不安になった。美香が云うヤクザと云うのはチンピラの間違いでは無いかと思った。

男は立ち上がることもなくボンヤリとしていると、蹴りが入った。

咄嗟に防ごうと腕を出したもの、その衝撃を緩和出来ず横に転がる。もう一人のスーツの視線がジョーに向く。

「あんた、この人のツレ？」

逃げ出してしまいたい、と強く思う。一秒に物凄い早さの瞬きを繰り返し、どう返答しようかと考えていると地面から何とも情けない

声が上がった。
「本当に申し訳ない、許して下さい」
土下座だった。見間違える事無いくらい土下座だった。ジョーは、とにかく落胆した。とにかく情けなく思った。男の後頭部を踏み
「何や、このドヘタレ」と、唾を吐いた。男は何も言わなかった。ただ謝った。この場に居ることを、ジョーは恥ずかしく思った。
「許したるわ」
「すいませんでした」
頭から足を退けて、また唾を吐いた。男達が去るまで、土下座は続いた。顔を上げた男に、ティッシュを差し出すと「君は本当に優しい奴だね」と云われた。ジョーは優しさと同情と云うのは何だか違うような気がして苛々した。膝を払い、立ち上がった男の背中は酷く小さなものに見えた。壁に設置されたダクトが発する鈍い音が響いていた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4491e/

無言の饒舌

2010年10月11日05時26分発行